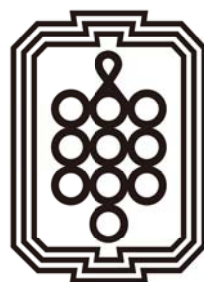


福岡女学院看護大学紀要

Bulletin of Fukuoka Jo Gakuin Nursing University

第 14 号 2023 年



福岡女学院看護大学

目 次

【研究報告】

術後初回歩行場面のシミュレーション教育の実践と評価 Practice and Evaluation of Simulation-based Education Focused on the First Ambulation after Surgery in Undergraduate Nursing Education	1
豊福 佳代 八尋 陽子 藤野 ユリ子 吉川 由香里 青木 奈緒子	

術後初回歩行場面のシミュレーション教育の実践と評価

Practice and Evaluation of Simulation-based Education Focused on the First Ambulation after Surgery in Undergraduate Nursing Education

豊福 佳代¹⁾ 八尋 陽子¹⁾ 藤野 ユリ子¹⁾ 吉川 由香里¹⁾ 青木 奈緒子²⁾
 Kayo Toyofuku Yoko Yahiro Yuriko Fujino Yukari Yoshikawa Naoko Aoki

要 旨

〔目的〕術後の安全な初回歩行には高度な観察と看護技術が必要であり、看護学生にとって難易度が高い。その援助プロセスを学ぶために術後初回歩行場面のシミュレーション演習を実施し、演習の効果を検証するために、学生の評価と学習満足度、学習意欲を明らかにした。

〔方法〕シミュレーションは、学生が開腹胃切除術を受けた模擬患者の歩行を援助する場面とし、臥床から端坐位まで(7分)と起立して歩行する(10分)2場面を実施した。実施者以外の学生は映像を見て観察した。実施後は全員でディブリーフィングを行った。研究協力の同意が得られた看護大学3年生80名に以下のアンケート調査を行った。①演習デザイン評価(Simulation Design Scale日本語版)、②学生の満足度と自信度(Student Satisfaction and Self-Confidence in Learning 日本語版)、③学習意欲に関する評価(ARCS評価シート日本語版)を用いて評価した。全て5段階評価で、高得点ほど各要素に同意しているとみなす。

〔結果〕各調査項目の要素ごとの平均値(標準偏差)は、①「演習デザイン評価」は、サポート:4.11(0.63)、目的の理解/情報提示:4.10(0.54)、忠実度:4.07(0.61)、フィードバック/リフレクション:3.93(0.64)、問題解決過程の活用:3.91(0.57)、②学生の満足度と自信度は、自信度:4.03(0.55)、満足度:4.00(0.63)、③学習意欲に関する評価は、注意:4.10(0.68)、関連:4.00(0.69)、満足:3.95(0.67)、自信:3.86(0.69)であった。

〔結論〕目的の理解、忠実度、注意や関連の得点が高かったことから、この演習で学生は初回歩行場面がイメージでき、看護が理解できた。今後は学生全員が実践し自信につながるような演習設計を検討する。

Abstract

Purpose: The safe first ambulation after surgery requires advanced nursing observation and skills, so it is difficult for nursing students. In order to learn the relevant nursing care processes, we conducted a simulation exercise focused on a first ambulation. The objective of this study was to investigate student motivation and satisfaction in regard to the exercise in order to assess its effectiveness.

Methods: The simulation consisted of a student helping an ambulation of simulated patient who received an open-gastrectomy. The simulation was carried out in two scenes, from the bed rest position to the sitting position (7 minutes), and standing up to walking (10 minutes). The other students observed the live video. A debriefing was performed after each scene with all students.

The consent was received from 80 third-year nursing university students, who were given the following questionnaires: (1) Simulation Design Scale (SDS) Japanese version, (2) Student Satisfaction and Self-Confidence in Learning Scale (SCLS) Japanese version, (3) the evaluation sheet based on ARCS motivation model (ARCS). Each are rated on a 5-point Likert scale. Higher scores indicate a greater agreement for each item.

Results: The average score (standard deviation) for each subscale of SDS was Support: 4.11 (0.63), Objectives and Information: 4.10 (0.54), Fidelity: 4.07 (0.61), Feedback/ Reflection: 3.93 (0.64), Problem-Solving: 3.91 (0.57). In terms of SCLS, Confidence: 4.03 (0.55) and Satisfaction: 4.00 (0.63). ARCS scores were Attention: 4.10 (0.68), Related: 4.00 (0.69), Satisfaction: 3.95 (0.67), and Confidence: 3.86 (0.69).

Conclusions: Because Objectives and Information, Fidelity, Attention and Related scores were higher than others, this exercise allowed students to understand nursing intervention for the first ambulation scene and to visualize the nursing care processes. To build student self-confidence, we plan to design an exercise that can be practiced by all students.

キーワード：周術期看護，術後初回歩行，シミュレーション教育，学生の評価

Keywords：Perioperative care, First ambulation after surgery, Simulation-based education, Student evaluation

¹⁾ 福岡女学院看護大学 ²⁾ 純真学園大学

I. 緒言

近年の医療の発展と高度化、複雑化に伴い、看護職者に求められる知識や技術も高度化、複雑化してきている。その結果、看護職者には多様な医療・看護場面に対応できる高度な看護実践能力が求められ、看護基礎教育からの育成が課題となっている。看護基礎教育における臨地実習は、看護学生（以下、学生）が学内で学んだ知識・技術・態度の統合を図りつつ、看護方法を習得するための貴重な場である（文部科学省，2017）。限られた臨地実習で看護を実践する機会を逃さないためには実習前の十分な準備が必要である。

A看護大学の成人看護学実習（急性期）では、周術期患者の看護を実践する。術後の早期離床の看護は、看護学士課程教育におけるコアコンピテンシー（日本看護系大学協議会，2018）に含まれる「急性期の治療を受ける患者への援助」として、臨地実習で経験し、修得しておきたい看護技術である。術後早期に離床することにより、術後合併症の予防や回復促進などの効果がある（矢永，高橋，2017）。術後の初回歩行時は、起立性低血圧や肺血栓塞栓症など、合併症による循環動態や呼吸状態の変化が起こりやすい時期であり、それらに注意しながら創痛の緩和や術後のドレーン類等の医療処置の管理が必要となる。安全に初回歩行を行うには、患者の変化を瞬時に判断する高度な観察力と看護技術が必要であり、学生にとって難易度が高い。橋本ら（2019）は、臨地実習での初回歩行援助の実践において、学生は、手術患者や初回歩行のイメージがもてなかったこと、臨機応変な対応が難しく、初回歩行援助に不安があったことを明らかにしている。

そのため、A看護大学の成人看護学では、術後初回歩行場面の看護をイメージし、必要な知識・技術・判断能力を養うことを目的として、3年次必修科目「クリティカルケア」に術後患者の初回歩行場面のシミュレーション教育を導入している。シミュレーション教育はアクティブラーニングを引き出す教育方略の1つとされ、学習者が主体的に思考して、自らの判断で行動する学習体験が可能となる（阿部，2016）。さらに、臨床場面がイメージできる、自己学習行動への動機付け、臨地実習への自信につながる、術後の観察方法の学習になる等、シミュレーション教育の効果は報告されており（平川ら，2018；及川ら，2017；高橋ら；2014；山内ら，2015）、現場から一歩離れた安全な環境で学習できることから、看護基礎教育でも取り入れられるようになっている。シミュレーション教育は学習者のレディネスに応じて、①思考や判断を訓練する机上トレーニング、②模擬患者やシミュレータを利用して実際に行動して、思考と行動の統合を図るトレーニング、③臨床で行うトレーニングの3段階がある（阿部，2016）。今回の演習は②の段階にあたり、術後模擬患者に初回歩行場面の看護を実践し、思考や判断、そして行動の統合を図るシミュレーションを実施した。

本研究の目的は、術後初回歩行場面のシミュレーション演習のデザインに対する学生の評価と学習満足度、学習意欲を明らかにし、演習の効果を検証することである。

II. 方法

1. 対象

A看護大学3年生111名のうち、科目「クリティカルケア」で実施した演習「術後初回歩行の援助」

に参加し、演習後のアンケート調査に回答して研究協力の同意が得られた80名のアンケート結果を分析対象とした。

2. 研究期間

アンケート調査：2019年5月の演習後に実施
アンケート結果の分析：2019年12月～2020年2月

3. 「術後初回歩行の援助」演習の概要

1) 演習目標

- (1) 術後1日目までの患者の状態から早期離床（初回歩行）が可能かを判断できる。
- (2) 離床時におこる合併症（問題）を予防する看護を計画・実施できる。
- (3) 実施した看護を評価できる。

2) 事例設定

患者は全身麻酔下で開腹幽門側胃切除術（ビルロートⅠ法再建）を受けた胃がんの60代男性とした。シミュレーション場面は術後1日目の朝、初めて離床する場面とした。患者は模擬患者とし、点滴ライン、腹腔内ドレーン（低圧持続吸引バッグに接続）、持続硬膜外麻酔のチューブ（PCAポンプに接続）など、実際に臨床で使用する物品を装着して再現した。シミュレーション中は模擬患者の反応を直接観察し、測定値や観察の結果はファシリテーター（教員）が提示した。

3) 学生の準備状況

対象学生が同時期に受講している看護過程演習科目「成人老年援助論演習」で展開している急性期患者の事例を用いた。術前、術中、術後の患者情報を提示し、本演習前に術当日観察シミュレーション演習を行うことで（豊福ら，2021）、術後1日目の患者の状態がイメージしやすいよう設計した。演習当日は、術後1日目の初回歩行場面の看護計画を立案して参加した。

4) 演習の進め方

履修者111名を1グループ4～5名で24グループを編成し、2会場に分かれて演習を実施した。各会場で3グループに1名配置したファシリテーターがサポートし、1会場に1名配置したデブリーファァーが全体を進行した（図1）。

シミュレーションは、代表グループの学生1名が

模擬ICU室で実施し、グループメンバーは傍でサポートおよび観察を行った。他の学生は会場に同時配信される映像を見て観察した。シミュレーションは、臥床から端坐位まで（7分間）と、端坐位から歩行して臥床するまで（10分間）の2場面に分けて実施した（カッコ内はシミュレーション実施時間）。

デブリーフィングは各会場で2回行った（20分、15分）。演習目標に沿って、離床時に注意が必要な術後合併症や看護上の問題の観察項目と観察方法を振り返り、安全・安楽に配慮した援助を考える発問を行った。演習目標は常に意識できるよう学生が記載するホワイトボードに掲示した。

4. 調査項目

1) 演習のデザインに関する評価

National League for Nursing (NLN) で開発された「Simulation Design Scale」(Jeffries, Rizzolo, 2006)の日本語版を、開発した伊藤ら(2015)に許諾を取り使用した。この尺度は「目的の理解/情報提示(5項目)」「サポート(4項目)」「問題解決過程の活用(5項目)」「フィードバック/リフレクション(4項目)」「忠実度(2項目)」の5要素20項目で構成され、反映度と重要度の2側面から評価する。

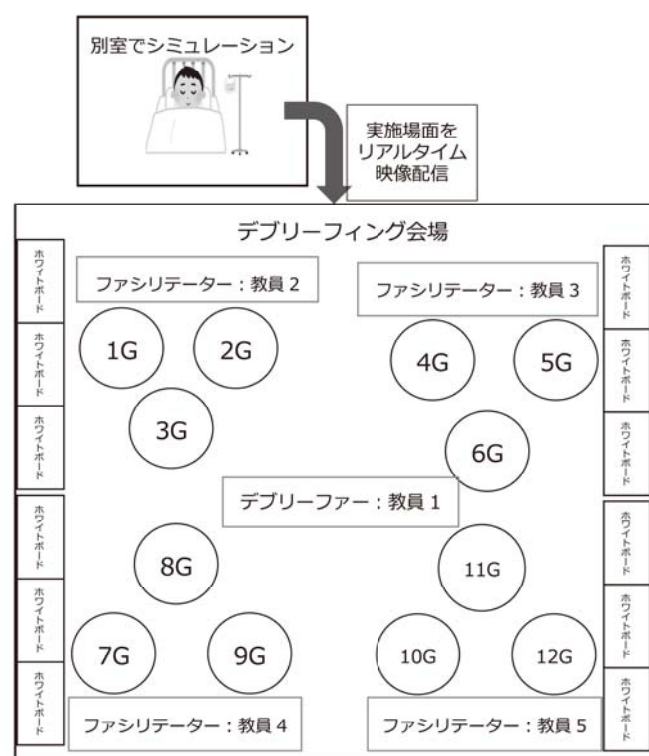


図1 演習会場の配置図

本調査では、これらの要素が演習デザインにどの程度取り入れられていたかという「反映度」を用いて評価した。反映度は「5：強く同意する」～「1：全く同意できない」の5件法で評価し、得点が高いほど反映度が高い。

2) 学生の満足度と自信度

National League for Nursing (NLN) で開発された「Student Satisfaction and Self-Confidence in Learning」(Jeffries, Rizzolo, 2006) の日本語版を、開発した伊藤ら (2015) に使用許諾を得て使用した。本尺度は「満足度 (5 項目)」「自信度 (8 項目)」の2要素13項目で構成され、「5：強く同意する」～「1：全く同意できない」の5件法で評価する。得点が高いほど満足度、自信度が高い。

3) 学習意欲に関する評価

ARCSモデルから作られたARCS評価シート日本語版を、開発した向後ら (1996) に許諾をとり使用した。この尺度は学習意欲に影響する因子とする「注意：Attention (4 項目)」「関連性：Relevance (4 項目)」「自信：Confidence (4 項目)」「満足：Satisfaction (5 項目)」に関する質問17項目で構成されている。ポジティブな印象 (5) ～ネガティブな印象 (1) の5段階SD法で評価し、ポジティブな印象ほど高得点になるよう設定した。

5. 調査方法

演習終了後に、学内の学習管理システムのアンケート機能に回答してもらった。そのうち本研究に同意の得られた対象者の回答を抽出した。個人を特定する情報を切り離し、匿名化したデータの分析を行った。

6. 分析方法

SPSS Statistic ver. 27 for Windows (日本IBM, 東京) を用いて評価項目の記述統計を行い分析した。

7. 倫理的配慮

研究の主旨、目的、調査方法や研究参加の任意性と同意撤回の自由、匿名性の確保、科目の成績とは無関係であること等の倫理的配慮、個人情報保護等について文書と口頭で説明を行い、同意書の提出を持って研究参加の意思を確認した。

研究参加の同意が得られた対象者の、学内の学習管理システムに提出済みのアンケート回答を抽出し、氏名を削除して匿名化した回答のみをデータとして使用した。

本研究は福岡女学院看護大学研究倫理委員会の承認 (第19-9号) を得て実施した。

Ⅲ. 結果

1. 演習デザインの評価

演習デザインの各項目および、5つの要素の平均値を表1に示した。5つの要素の点数 (平均値±標準偏差) が高い順に、「サポート (4.11±0.63)」「目的の理解/情報提示 (4.10±0.54)」「忠実度 (4.07±0.61)」「フィードバック/リフレクション (3.93±0.64)」「問題解決過程の活用 (3.91±0.57)」であった。細項目では『演習の意図や目的について、はっきりと理解できた』の点数が最も高く、『演習での可能性のすべてを探ってみようという気持ちになった』や『自分の知識・技術のレベルに合致しているように設計されていた』は点数が低かった。

2. 学生の満足度と自信度

学生の満足度は平均値4.00±0.63、自信度の平均値は4.03±0.55であった。全ての質問項目の平均値を表2に示した。満足度の細項目では、『演習の指導方法は効果的で役に立った』(4.06±0.62)と『演習で得た学習教材や活動で看護援助における学習がしやすくなった』(4.06±0.68)の得点が高かった。『担当教員が演習を進めるやり方は楽しかった』(3.95±0.83)や『演習で教員が指導した方法は私の学習方法に適していた』(3.95±0.73)は他の項目に比べて低かった。自信度の細項目では、『演習で学ぶべきことを学ぶのは学生としての責任』が4.23±0.55で最も高く、『演習内容から何を学ぶべきなのか理解』(4.09±0.56)、『演習が重要な内容を取り扱っていると確信』(4.07±0.65)がそれに続いた。一方で、『演習活動の内容を十分習得している自信』は3.81±0.89で、全項目の中で最も低かった。

3. 学習意欲に対する評価

学習意欲に関する評価の因子得点を表3に示した。因子得点の平均値が高い順に「注意 (4.10±0.68)」「関

表 1 演習デザインの評価

質問項目	n	平均値	標準偏差
目的の理解／情報提示 (Objective and Information)		4.10	0.54
1 演習の開始時点で、その目的についての十分な情報が提示され、やる気を起こしてくれた	79	4.11	0.62
2 この演習の意図や目的について、はっきりと理解できた	79	4.22	0.55
3 この演習によって明確な情報が十分に得られ、与えられた状況に対する問題解決ができた	79	4.04	0.65
4 この演習の間、十分な情報が与えられた	79	4.09	0.66
5 指示が適切で、私の理解を助けるようになっていた	79	4.06	0.63
サポート (Support)		4.11	0.63
6 タイムリーに、サポートが行われた	79	4.13	0.71
7 支援が必要な時、それに対して対応してもらえた	79	4.15	0.66
8 演習の間、教員の支援にサポートされているという実感を持てた	79	4.11	0.75
9 学習プロセス全てを通して、サポートを受けた	80	4.01	0.74
問題解決過程の活用 (Problem Solving)		3.91	0.57
10 自力での問題解決が促された	80	4.03	0.69
11 この演習での可能性のすべてを探ってみよう、という気持ちになった	80	3.83	0.76
12 この演習は、自分の知識や技術のレベルに合致するように設計されていた	80	3.85	0.70
13 この演習で私は、看護のアセスメントやケアに優先順位をつける機会が与えられた	80	3.93	0.67
14 この演習では私は、自分の担当する患者さんのための目標を設定する機会が与えられた	80	3.93	0.69
フィードバック／リフレクション (Feedback/Guided Reflection)		3.93	0.64
15 建設的な振り返りがあった	80	3.94	0.66
16 タイムリーに、振り返りを受けた	80	3.94	0.70
17 この演習で私は、自分自身の行動様式や行為を分析することができた	80	3.88	0.77
18 この演習の後で、教員からガイダンスや振り返りを受ける機会があり、それにより知識のレベルをさらに高めることができた	79	3.95	0.77
忠実度 (Fidelity < Realism >)		4.07	0.61
19 演習のシナリオは、実際の状況をよく反映していた	80	4.09	0.62
20 演習のシナリオには、現実の各種要因や状況、変数 (検査値) などが取り入れられていた	79	4.06	0.69

表 2 学生の満足度と自信度 (n=80)

	平均値	標準偏差
満足度 (Satisfaction with Current Learning)	4.00	0.63
1 この演習での指導方法は効果的で、役に立った	4.06	0.62
2 この演習で得た各種の学習教材や活動で、基本的な看護援助における学習がしやすくなった	4.06	0.68
3 担当教員が演習を進めるやり方は、楽しかった	3.95	0.83
4 この演習で使用した教材は、学ぶ気にさせ、学習の役に立った	3.99	0.79
5 担当教員が演習で指導した方法は、私の学習方法に適していた	3.95	0.73
自信度 (Self-confidence in Learning)	4.03	0.55
6 担当教員が私に示した演習活動の内容を、十分に習得しているという自信がある	3.81	0.89
7 この演習は、基礎的な援助技術を習得するために欠かせない、重要な内容を取り扱っていたと確信している	4.07	0.65
8 この演習から、臨床の現場で必要な仕事を行う上で求められる知識やスキルを、確実に得られていると思う	4.04	0.74
9 担当教員はこの演習の指導で、役に立つ教材を活用していた	4.00	0.66
10 この演習で学ぶべきことを学ぶのは、学生としての私の責任だ	4.23	0.55
11 この演習で取り上げられた考えが理解できない場合、どこに支援を求めればよいのかを知っている	4.01	0.67
12 こうした技術の重要な側面を学ぶ上で、演習をどう利用すればよいのか理解している	4.01	0.63
13 この演習の内容から何を学ぶべきなのかを理解している	4.09	0.56

連 (4.00 ± 0.69)」「満足 (3.95 ± 0.69)」「自信 (3.95 ± 0.67)」であった。項目全ての結果を図 2 に示した。『新鮮な』は 4.27 ± 0.64 で最も高得点であり、『変化に富んだ』(4.09 ± 0.75)、『自発的な』(4.09 ± 0.77)、『やりがいがあった』(4.09 ± 0.8) がそれに続いた。一方で、『自信がついた』(3.61 ± 0.92)、『自分でコントロールできる』(3.80 ± 0.75)、などの「自信」の項目得点が他の項目より低かった。

IV. 考察

急性期看護学実習で学生が経験する術後の初回歩行場面のシミュレーション演習を行った。学生の評

価をもとに本演習の効果について考察する。

1. 演習の設計と学習内容

演習デザイン評価の『演習の意図や目的についてははっきりと理解できた』、学生の満足度の『演習で学ぶべきことを学ぶのは学生の責任』の得点、さらに学習意欲における「注意」や「関心」の得点が高かったことから、学生は初回歩行場面の援助を学ぶ必要性を理解していた。また、「忠実度」が比較的高く評価されており、援助プロセスのイメージ化ができたと考えられた。

伊藤ら (2019) は、好奇心が旺盛で見通しが見えない状況でも新しいことに取り組むといった能動的学習への準備性がよい学生は、シミュレーション教育の満足度・自信度やデザインへの評価が高かったことを報告している。本演習は、同時期に履修している急性期看護過程の科目で展開している事例を用いて、術当日の観察シミュレーションの後のタイミングで実施した。そのため、術後患者をイメージし、状態をアセスメントした上でシミュレーションに臨

表 3 学習意欲に関する評価 (因子得点) (n=80)

因子	平均値	標準偏差
A: 注意 (Attention)	4.10	0.68
R: 関連 (Relevance)	4.00	0.69
C: 自信 (Confidence)	3.86	0.69
S: 満足 (Satisfaction)	3.95	0.67

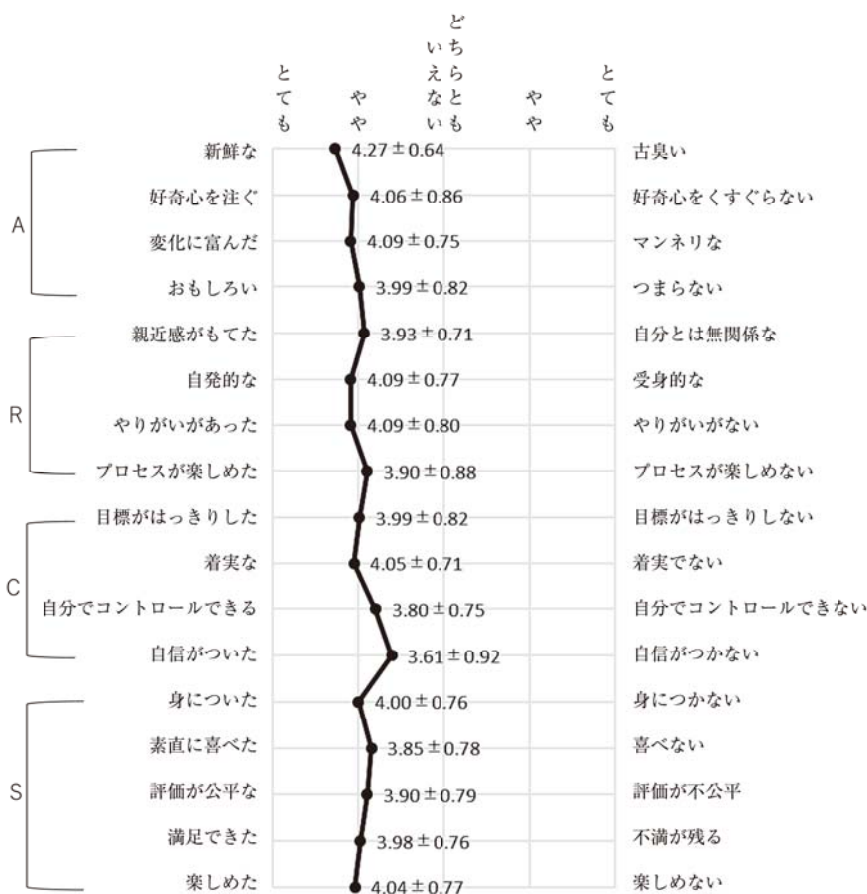


図 2 学習意欲に対する評価 (n=80)

むことができたと考えられる。看護過程の展開とシミュレーション演習を組み込むことで、事例患者の理解などの準備性が高まり、術後初回歩行の看護は習得すべき看護技術であることの自覚と、臨地実習で実践する自己のイメージ化につながり、演習への満足度に繋がったと考えられる。

2. 学生の満足度と自信、学習意欲について

100人という多人数で行う演習時は、他の学生の集中が途切れないようにできるだけ学生が心と身体を動かしながら臨床をイメージし、知識と実践を統合できる仕掛けを準備することが重要である（阿部、藤野，2018）。今回、学生が演習の目標を常に意識し、観察する学生への課題を明確に提示したことにより、映像であっても学生はシミュレーションに没入でき、知識と実践を統合する思考のトレーニングは実施できたと考える。デブリーフィング会場では3グループに1名のファシリテーターを配置し、学生はサポートが受けられたと実感しており、満足度にも繋がったと考えられる。

その一方で、演習デザイン評価の、「問題解決過程の活用」や「フィードバック／リフレクション」の評価が他項目に比べ低かった。そのうち『演習での可能性のすべてを探ってみようという気持ちになった』『自分自身の行動様式や行為を分析できた』は各要素の中で最も得点が低かった。正課科目で行う演習では、時間的制約からシミュレーションを実施できる人数には限りがあり、ほとんどの学生は観察者として参加することになる。一部の学生にとって、初回歩行場面の看護を実践できなかったことが、自己の行動分析の得点が低かった要因のひとつであることが推察された。また、『演習活動の内容を十分に習得しているという自信』や学習意欲の「自信」の得点が他の項目より低かったことにも影響したと考えられる。

3. 今後の課題

今回のシミュレーション演習は、シチュエーションベースドトレーニングにあたり、与えられた状況下での思考と判断、行動化を訓練するものである（阿部，2016）。学生全員が看護技術を習得するには、本演習の時間内では難しく、別の機会を設けてト

レーニングする必要がある。A看護大学の成人看護学急性期実習では、実習初日を学内実習日に設定し、術当日の観察、および術後1日目の初回歩行場面の援助を、タスクトレーニングとして学生全員が実施するプログラムを設定している。今後は、このプログラムの効果を客観的に評価し、臨地実習での実践と学びに繋がるように検討する必要がある。

V. 結語

術後患者の初回歩行場面のシミュレーション演習を通して、学生は初回歩行場面の援助プロセスが理解でき、イメージ化ができていた。しかし、ほとんどの学生は観察者として参加しており、実践者の行動を自分の行動として分析することは、不足していた。また、今回の演習では技術を十分に習得したという自信には繋がっていない学生もいた。

科目でのシミュレーション演習を踏まえ、実習前学内演習では学生全員が実践する機会を設けるなどの段階的な演習を設計し、臨地実習では自信をもって実践に繋がられるよう検討する必要がある。

本研究は、特定の団体との利益相反はない。

本研究の一部は、25th EAFONS (East Asian Forum of Nursing Scholars Conferences) (2022, Web開催)にて、ポスター発表を行った。

引用／参考文献

- 阿部幸恵. (2016). 医療におけるシミュレーション教育. 日本集中治療医学会雑誌, 23, 13-20.
- 阿部幸恵 (監), 藤野ユリ子 (編). (2018). 看護基礎教育におけるシミュレーション教育の導入. 65-66, 日本看護協会出版会, 東京.
- 橋本茜, 堀田由季佳, 石田咲他. (2019). 初回離床援助の実践における看護学生の困難—成人看護学実習後のインタビュー分析から—, 日本赤十字豊田看護大学紀要, 14 (1), 81-89.
- 平川善大, 八尋陽子, 深野久美他. (2018). 周術期看護におけるシミュレーション学習に対する学生の評価. 日本シミュレーション医療教育学会雑誌, 6, 36-40.

- 伊藤朗子, 富澤理恵, 山本純子他. (2019). 看護系大学生の能動的な学習への準備性とシミュレーション教育への評価. 日本シミュレーション医療教育学会雑誌, 7, 47-52.
- 伊藤朗子, 富澤理恵, 山本直美他. (2015). シミュレーション教育を用いた基礎看護技術演習の評価. 千里金蘭大学紀要, 12, 51-59.
- Jeffries, PR., Rizzolo, MA. (2006). Designing and Implementing Models for the Innovative Use of Simulation to Teach Nursing Care of Ill Adults and Children: A National, Multi-Site, Multi-Method Study. Summary Report. 2023-08-31. <https://www.nln.org/docs/default-source/uploadedfiles/professional-development-programs/read-the-nln-laerdal-project-summary-report-pdf.pdf>
- 向後千春, 杉本圭優, (1996). ARCSモデルに基づくCAI教材の評価項目の試作. 教育システム情報学会第21回全国大会, 225-228.
- 文部科学省, 看護学教育モデル・コア・カリキュラム. (2017). 2023-08-31. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf
- 日本看護系大学協議会. 看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標. (2018). 2023-08-31. <https://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf>
- 及川紳代, 安藤里恵, 遠藤良仁他. (2017). 成人看護学領域における術後看護のシミュレーション演習の課題の検討. 岩手県立大学看護学部紀要, 19, 17-32.
- 高橋甲枝, 相野さところ, 村山由起子他. (2014). 『手術直後の患者の観察』のシミュレーション演習の効果. 西南女学院大学紀要, 18, 45-54.
- 豊福佳代, 八尋陽子, 藤野ユリ子他. (2021). 術直後の看護場面におけるシミュレーション教育の実践と評価. 福岡女学院看護大学紀要, 11, 43-49.
- 山内栄子, 西園貞子, 林優子. (2015). 看護基礎教育における臨床判断力育成を目指した周手術期看護のシナリオ型シミュレーション演習の効果の検討. 大阪医科大学看護研究雑誌, 5, 76-86.
- 矢永勝彦, 高橋則子 (編). (2017). 臨床外科看護 総論. 331-312, 医学書院, 東京.

編集後記

紀要第14号の発刊に当たり、学内外の関係者の皆様の多大なご支援に御礼申し上げます。

今年度は、福岡女学院看護大学紀要投稿内規を改正し、投稿者の資格を拡大しました。具体的には、投稿者は本学教職員のみならず、本学大学院生、本学修了生・卒業生、その他紀要委員会が適切と認めた者としてしました。今号にはこれまで同様、本学教員からの投稿のみでしたが、次号にはそれ以外の方々からの投稿も期待したいところです。そして、今号の掲載は1報とかなり少ない投稿数に留まりました。次号は、多くの方々の教育及び活動に関する実践をご報告いただき、研究及び教育の発展に寄与することを願っております。

最後になりましたが、お忙しい中、紀要投稿してくださった研究者の皆様及び査読いただきました先生方に感謝を申し上げます。

委員長 吉武 美佐子

紀要委員会

委員長 吉武 美佐子

委員 酒井 康江 潮 みゆき

本武 敏弘 吉川 由香里

事務部 森 貴志
学務課

福岡女学院看護大学紀要 第14号

2024年3月

編集 福岡女学院看護大学紀要委員会

発行 福岡女学院看護大学

〒811-3113 古賀市千鳥1-1-7

TEL 092-943-4174 (代)

<https://ns.fukujo.ac.jp/>

印刷 株式会社ミッションサポート

〒811-1313 福岡市南区日佐3-42-1

TEL 092-575-2551

Bulletin of Fukuoka Jo Gakuin Nursing University

Vol.14, 2023

CONTENTS

【Research Notes】

Practice and Evaluation of Simulation-based Education Focused on the First Ambulation after Surgery in Undergraduate Nursing Education

Kayo Toyofuku, Yoko Yahiro, Yuriko Fujino, Yukari Yoshikawa, Naoko Aoki